近畿自動車道

埋蔵文化財調査報告II

——日余1号墳——

1974

三重県教育委員会
日本道路公団名古屋建設局

序

近畿自動車道関・伊勢線建設にともない、三重県教育委員会は、日本道路公団名古屋建設局の委託により、昭和47～48年の２年度にわたり、６箇所の遺跡を発掘調査した。

今回、報告する日余１号墳もその１つで自動車道建設の土取り予定地に位置するため発掘調査を実施したものである。

本書の刊行にあたり、調査委託者である日本道路公団名古屋建設局、道路公団津工事事務所、県土木部をはじめ、調査に協力された安濃村教育委員会、新日本土木安芸作業所および地元各位に対して深く謝意を表する。

昭和49年3月29日

三重県教育委員会

教育長　**清水英明**

例　　言

1．本書は、日本道路公団名古屋建設局の委託により、三重県教育委員会が行なった近畿自動車道関・伊勢線建設土取場予定地内の日余1号墳の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行なった。

調 査 主 体

三重県教育委員会教育長　清水　英明

調査費負担者

日本道路公団名古屋建設局

調 査 担 当 者

吉村　利男（三重県教育委員会文化課）

3．発掘調査にあたっては、県土木部用地対策課、日本道路公団津工事事務所および新日本土木安芸作業所の全面的な協力を得た。

4．主体部墓坑掘り方に並べられた河原石の岩質鑑定は三重県教育委員会文化課文化財係長山本威による。

5. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください

目　　次

Ⅰ　前　　言……　1

Ⅱ　位置・その歴史的環境……　2

　A　位置と地形……　2

　B　歴史的環境……　2

Ⅲ　発掘調査……　3

　A　墳　　丘……　3

　B　主　体　部……　4

　C　出土遺物……　4

Ⅳ　結　　語……　6

図　　版

図版1　位置図（1：50,000）
図版2　地形図（上1：5,000　下1：1,000）
図版3　墳丘測量図（1：150）
図版4　主体部実測図（1：40）
図版5　墳丘断面図（1：80）
図版6　遺物実測図（1：6）拓影（1：3）
図版7　遺物拓影（1：3）
図版8　遠　　景
図版9　発掘前の墳丘、主体部全景
図版10　西側主体部、東側主体部
図版11　発掘後の墳丘
図版12　出土遺物

Ⅰ　前　　言

埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護委員会（文化庁）が、日本道路公団と覚書を交換したのは昭和42年９月のことで、三重県においては、翌43年の東名阪道路建設に伴う発掘調査を控えていた。

東名阪道路に伴う発掘調査は、文化財保護の関心を高め、三重県にも埋蔵文化財担当の専門職員が配置された。

しかし、一方では開発が大規模化され、埋蔵文化財をめぐる問題は日々増加の途をたどった。

近畿自動車道関・久居線は〝中南勢開発〟〝50年国体〟の呼び声高い昭和46年に計画された。昭和46年10月、三重大学歴史研究会に依頼して、路線内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、路線内および付帯事業地内には、遺物散布地３、古墳３が位置することが明らかになり、以後その取り扱いについて協議が進められてきた。

６箇所の埋蔵文化財のうち、山口遺跡、大ケ瀬２号墳、平栄遺跡は昭和47年度に、跡部遺跡、大久戸古墳は昭和48年10月に、発掘調査が実施され、特に大ケ瀬２号墳は弥生時代の墳墓であることがわかった。また平栄遺跡からも弥生時代の住居址が発見された。

残る１箇所の日余１号墳は、道路建設の土取予定地内に含まれるものであった。昭和48年11月12日、日本道路公団名古屋建設局は三重県教育委員会宛に意見聴取の文書を提出し、11月27日、県教育委員会は発掘調査の実施も止むを得ないものと思われるとの回答をした。

ところが、発掘調査は数多い事前調査のスケジュールのあい間をぬって行なわなければならず、調査期間の設定にあたっては、道路公団・県土木部・教育委員会の度重なる協議がもたれた。昭和49年２月末には調査を終了し、土取りに入らねばならないという工期の都合上、発掘調査の開始は昭和49年早々にしぼられ、県教育委員会が調査主体になって実施することとなった。

II　位置・その歴史的環境

A　位置と地形

安濃川左岸の低丘陵地、それも谷底平野が複雑に入りくむ標高38mの細長い丘陵に日余1号墳は位置する。行政的には安芸郡安濃村日余字寒谷に属し、現状は山林である。

この低丘陵地は芸濃町から津市広明町まで約10kmにも及び、地質学的には第3紀鮮新世に属する奄芸層群と呼ばれている。

丘陵の所々には一段と高い箇所や崖状の地形が見られ、日余1号墳の築造された丘陵頂部も南に向って、細くのびている。そのため当初は大きな前方後円墳を想わせるようでもあった。おそらくは、細砂と粘土層の地質が浸蝕され、地形を変形してしまったのであろう。

B　歴史的環境

安濃川は流域面積106.7km²、河道延長30.7kmにわたる中勢地域における代表的な河川である。人びとはそこに生産の場を求め、数多くの遺跡・古墳を残した。

弥生時代の遺跡としては日余1号墳の位置する丘陵地の南にある安濃村・北端遺跡、津市・亀井遺跡、森山遺跡、竹川遺跡、桐山遺跡、養老遺跡、納所遺跡などがある。これら沖積地の遺跡は県営圃場整備事業や道路建設に伴い発掘調査が実施されている。また岩田川右岸の台地、丘陵地の発掘例も多く、津市半田地区の半田高松遺跡、上村遺跡のほか野田地区の柳谷遺跡、大ヶ瀬遺跡、平栄遺跡では、細い丘陵の尾根にいくつかの住居址が検出されている。

こうした時期の墳墓も発掘されており、津市半田・高松弥生墳墓、大ケ瀬弥生墳墓など、すでに階級の発生を物語るものとして注目されている。

津市片田志袋町の坂本山古墳群は5世紀初頭に築造された方墳群で、安濃川流域は方墳の多い地域として特筆できる。この流域最大の規模を有する安濃村田端上野・明合古墳をはじめ、津市分部・

メクサ古墳、日余１号墳の近くの安濃村清水・堂山１号墳、津市片田井戸町・新畑遺跡から発見された古墳、津市野田・野田５号墳などが方墳として知られる。

古墳の分布は安濃川右岸に集中し、長谷山及び経ヶ峰山麓には津市及び安濃村の大山田古墳群、大名塚古墳など横穴式石室をもつ後期古墳が数百にも及び群集し、津市神戸の丘陵地などには前方後円墳も見られる。それに対し、安濃川左岸の低丘陵地には古墳の分布は数少ない。最近調査された堂山１号墳は、主体部に河原石がかなり見られ、津市長岡町・君ケ口古墳の主体部は「かまど塚」あるいは「木芯粘土室」と呼ばれるものであった。

また安濃村清水・清水西遺跡、津市河辺町・桐山遺跡、津市納所　養老遺跡など古墳時代の遺跡も次々に明らかになっている。こうした調査結果のデーターをこと詳細に分析し検討する中で、日余１号墳のおかれる歴史的環境はより一層明らかになるであろう。

III　発掘調査

A　墳　　丘（図版３、５）

日余１号墳は発掘着手前より埴輪片が散布しており古墳であることに疑いはなかった。しかし、すでに墳頂部南側では地山の細砂が露呈し、西側墳麓は大きく流失していたため古墳の形態・規模等については不詳なところが多かった。

調査の結果、日余１号墳は東西13m、南北16mの方墳で、築造当初よりもかなり変形していた。墳丘の東側では36mの等高線に沿って、墳麓基底線が求められ、断面ではわずかに黒色土が堆積していた。また北側では、36.75mの等高線に沿って基底線が考えられる。

墳丘の高さは東側で約2.2mを計測するが、南および西側ではさほど高くない。それは古墳の築造が細長く南北にのびた丘陵頂部のしかも北東部の急斜面に片寄ってなされていることによる。墳丘は地山を巧みに整形し、南東部隅では溝を掘り、方墳に仕上げている。盛土は墳丘の北半部のみに見られるだけで、0.7m程度の厚さで地山である細砂が盛られている。

地山および盛土が、流失しやすい細砂や細礫であるため、北西部や北東部はかなり変形してしまっていた。また墳丘の築造後あるいは主体の埋葬後、円筒埴輪がたてられたのであろうが、その様相を知ることのできるものはなかった。埴輪のほとんどが細片となり、墳頂・墳麓のいたるところで発見された。それは流失しやすい土質と墳頂部に掘られた盗掘のため攪乱したためと思われる。

埴輪片の他には、須恵器器台の破片１と径0.35cm、厚さ0.2cmの滑石製の臼玉１が出土したのみであった。

B　主　　体　　部（図版４）

主体部と考えられる土坑は南北に長く、東西に並行する墓坑のそれぞれ中央部から発見された。西側の主体部は幅0.75ｍ、長2.8ｍ、東側は幅0.65ｍ、長2.1ｍで、それぞれ地山をわずかに掘り込んでおり土坑内には地山に比べや、黒っぽい細砂が堆積していた。副葬品は２主体のいずれからも発見されなかった。

墓坑は、東側のものが幅1.8ｍ、長3.6ｍ、深０.３ｍを計測するが、西側の墓坑は地山を掘り込んだ南側の短辺部のみが検出されただけで規模等はわからない。２つの墓坑とも南側掘り方には、10cm前後の河原石（岩質は両雲母花崗岩、チャート、アプライト、白雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、縞状片麻岩などがある）が並べられていたが、何の目的でなされたかは明らかでない。

C　出　土　遺　物（図版６、７）

主体部からの出土遺物は全くなく、墳頂部および墳麓部に散在していた埴輪片と須恵器器台片１、滑石製臼玉１が出土したにとどまる。

○埴　　輪

形象埴輪(6)　６cm×５cmの１破片のみで、何の埴輪かは明らかでない。ヘラ状器具による線刻が見られる。

朝顔形埴輪（２～４、７～10）　細かい刷毛目のＡ類と粗い刷毛目のＢ類があり、Ａ・Ｂ類とも

に須恵質のもの（３、７、９）と土師質のものがある。

Ａ類（２・３・７）　２・３は頸部および肩部の破片で、頸部には断面三角形の突帯がめぐる。３の円筒部は縦方向に、肩部は右下りに、口縁部はほゞ縦方向に刷毛目が施こされ、肩部にはヘラ記号がある。２は外表は風化しているが、細かい刷毛目がつけられていたと考えられる。７は口縁部の破片で内外面ともに刷毛目が見られる。

Ｂ類（４、８～10）　非常に粗い刷毛目のもので、４、８、９の口縁部には縦方向に施こされている。中でも９は上段部の刷毛目は下段に比べ粗く、内面にも横方向の刷毛目がある。また４には一部簾状になった部分も見られる。４の肩部は丸く仕上げられ、頸部よりやゝ下がった位置にタガが貼りつけられていたらしく、はがれたあとが見られる。

なお10は肩部の破片であるが、粗いハケ目が横方向に走り、タガは細いものであり、器壁も薄く小型のものである。

円筒埴輪（５、12～15、17～39）　円筒部の破片である。須恵質のものと土師質のものとがあり、ヘラによる線刻のされたものがかなりある。５は口縁部内面、12は円孔のそばに×印のヘラによる線刻があり、13～15は弓をひくような線刻が見られる。13、15は同一個体とも考えられ、いずれも円孔のそばに線刻がある。

刷毛目は縦方向および斜方向に施こされるＡ類と横方向のＢ類とがある。

Ａ類（５、12、17～20、24～31、36～37）　タガによって区切られた段部の幅はせまく、５、29は10cm前後であり、５は口径約32cmで、２段、３段には円形の透しが千鳥にあけられている。タガは上辺部の幅1.0cm、高1.0cmで、そのほとんどのタガの中央はやゝ凹んでいるが、31はタガの幅が広く、低い。

口縁端部はやゝ外傾し角ばっているものとほゞ水平になるものとがあり、底部の形態も36のように肥厚するものが多いが、37のように薄く引き出されているものも見られる。

Ｂ類（13～15、21～23、32～35、38～39）　いずれも横方向に刷毛目がつけられているが、特に細かいもの（22～23、38）もある。22～23の口縁端部は外面が丸く仕上げられ、38の底部も特徴的である。

タガは細く高いもの（13、15、35）と幅広いものとがあり、13、15には円形の透しのそばにヘラによる線刻が見られる。

幅２～３cmの粘土ひもの巻き上げは35で右まきの様子がわかり、23の口縁部、39の底部では粘土ひもの幅が広い。

○その他の遺物

須恵器器台(1)　ゆるく内弯する脚端部の１片のみで、杯部等の破片は発見されなかった。３条の沈線で区切られた最下段には８本を単位とする櫛描波状文を２段にめぐらせ、後に長方形あるいは台形の透しが８方向に入れられている。

滑石製臼玉　径0.35cm、厚さ0.2cmのもので中央に径0.12cmの孔を穿っている。

Ⅳ　結　　語

日余１号墳の発掘調査結果に基づき、２、３の問題を次にまとめて、調査報告の結語としたい。

１．日余１号墳は一辺が約15ｍの方墳で、安濃川流域に多く見られる墳形を呈する。すでに発掘調査された例だけでも、５世紀初頭の坂本山古墳群、６世紀代の堂山１号墳、野田５号墳、メクサ４号墳、新畑古墳などがあり、この流域最大の明合古墳も方墳であることを考えると、きわめて特徴的であると言える。

２．墳丘の築造は、自然の地形を整形してなされ、盛土は西半部にわずかに認められるにすぎない。墳丘頂部の突端部のしかも片側だけを整地し、主体を埋葬する。こんな方法は堂山１号墳にも類似し、堂山１号墳でも、盛土は丘陵の頂部の片側にはりつかせた格好になっている。

３．墳頂部・墳麓部から出土した埴輪片であるが、なかには同一個体のものがかなり離れて発見されたこともあり、もともとは、墳頂部に何本かが樹立されていたのであろう。それが、流失しやすい地質や盗掘の影響で、墳麓の各所に散在し、墳麓部をめぐる円筒埴輪列の存在は考えられない。

埴輪をもった古墳は、この安濃川流域でかなり知られている。明合古墳をはじめ、中相野古墳、藤ヶ森古墳、小舟古墳、くすみ塚古墳、元井池古墳、半田高松３号墳、大釜池古墳、西河辺古墳、堂山１・２号墳などあげられるが、とりわけ元井池古墳や堂山１号墳などの発掘調査の結果では、埴輪列はめぐっていない。元井池古墳は墓坑の端に２～３本が樹立され、堂山１号墳でも墳頂部に何本かがたてられたにすぎない。こうした埴輪のあり方についても、注目すべき問題である。

４．主体部における副葬品は１点も発見されなかった。すでに流失したというより、元来副葬品を伴わなかったと考えられる。

こうした例は、安濃川流域だけでも、坂本山８号墳、野田５号墳、新畑古墳があり、元井池古墳や堂山１号墳でも副葬品は乏しかった。しかし、昭和48年度に発掘調査された君ヶ口古墳などでは「かまど塚」あるいは「木芯粘土室」と言われる主体部から多量の副葬品が出土した。また横穴式石室の大名塚古墳からも多くの遺物が出ており、その相違は、古墳の性格にどうかかわるのか、古墳の形態・規模・築造時期等についての総合的な分析を待ちたい。

５．目的は不明であるが、主体部墓坑の掘り方には10cm前後の河原石が並べられていた。日余１号墳の近くの堂山１号墳の主体部からも河原石がかなり発見されており、この古墳とは多くの点で類似している。

６．日余１号墳の築造は、墳丘および須恵器、埴輪等から考えて、各地に多くの古墳がつくられる６世紀も中頃だろうか。

参　考　文　献

小玉道明ほか「坂本山古墳群・坂本山中世墓群」　津市教育委員会　昭和45年

三重大学歴史研究会「野田遺跡群発掘調査報告」　津市教育委員会　昭和49年

三重大学歴史研究会「メクサ４号墳発掘調査報告」　津市教育委員会　昭和47年

三重大学歴史研究会「三重県安芸郡明合古墳について」　ふびと　23　昭和40年

小玉道明ほか「元井池古墳発掘調査報告」　津市教育委員会　昭和44年

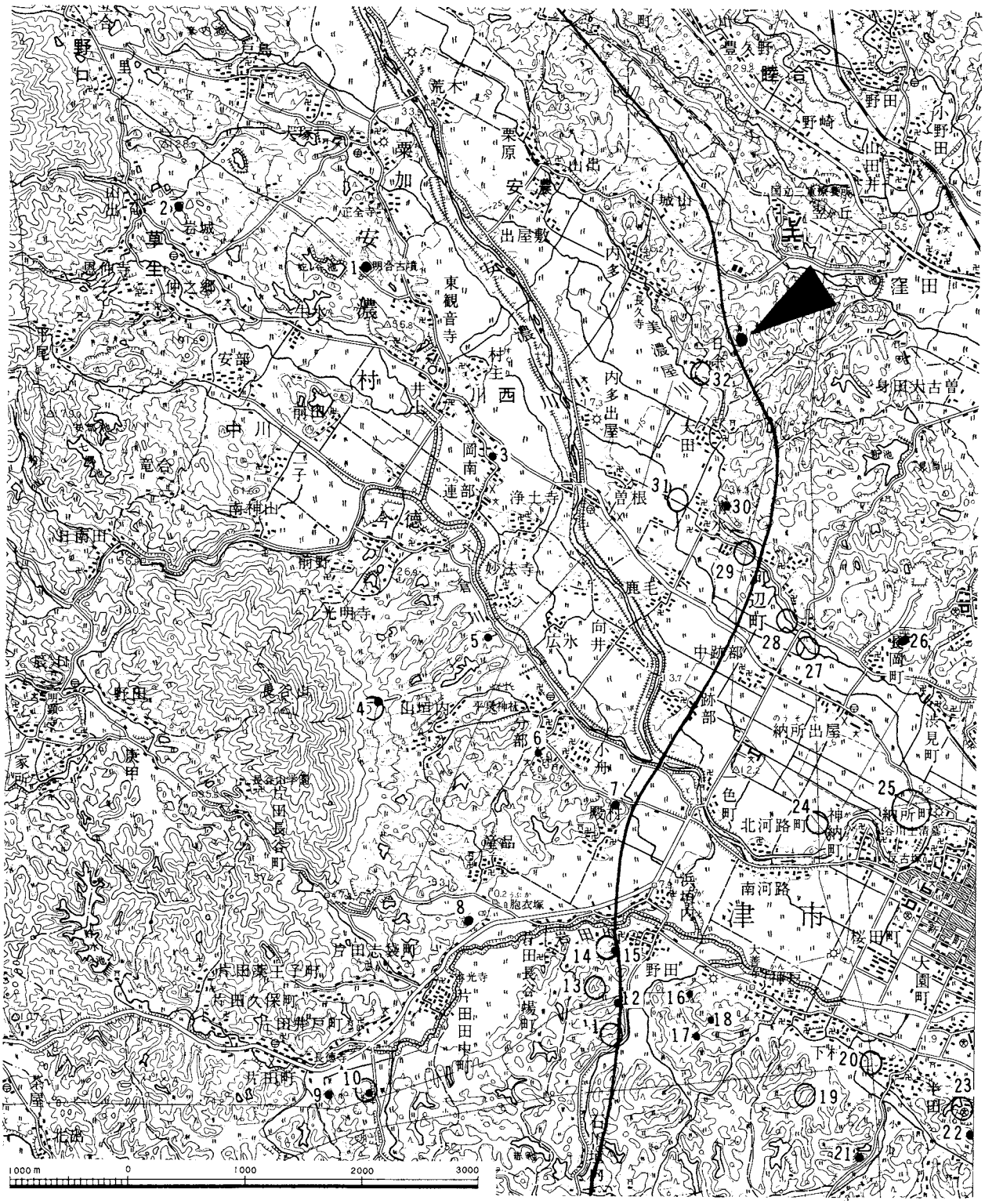
村上喜雄「三重県安芸郡安濃村大字山出大名塚古墳について」　三重の文化37　昭和41年

三重大学歴史研究会「堂山１号墳発掘調査報告」　安濃村教育委員会　昭和49年

萱室康光「君ケ口古墳発掘調査概報」　津市民文化１　昭和49年

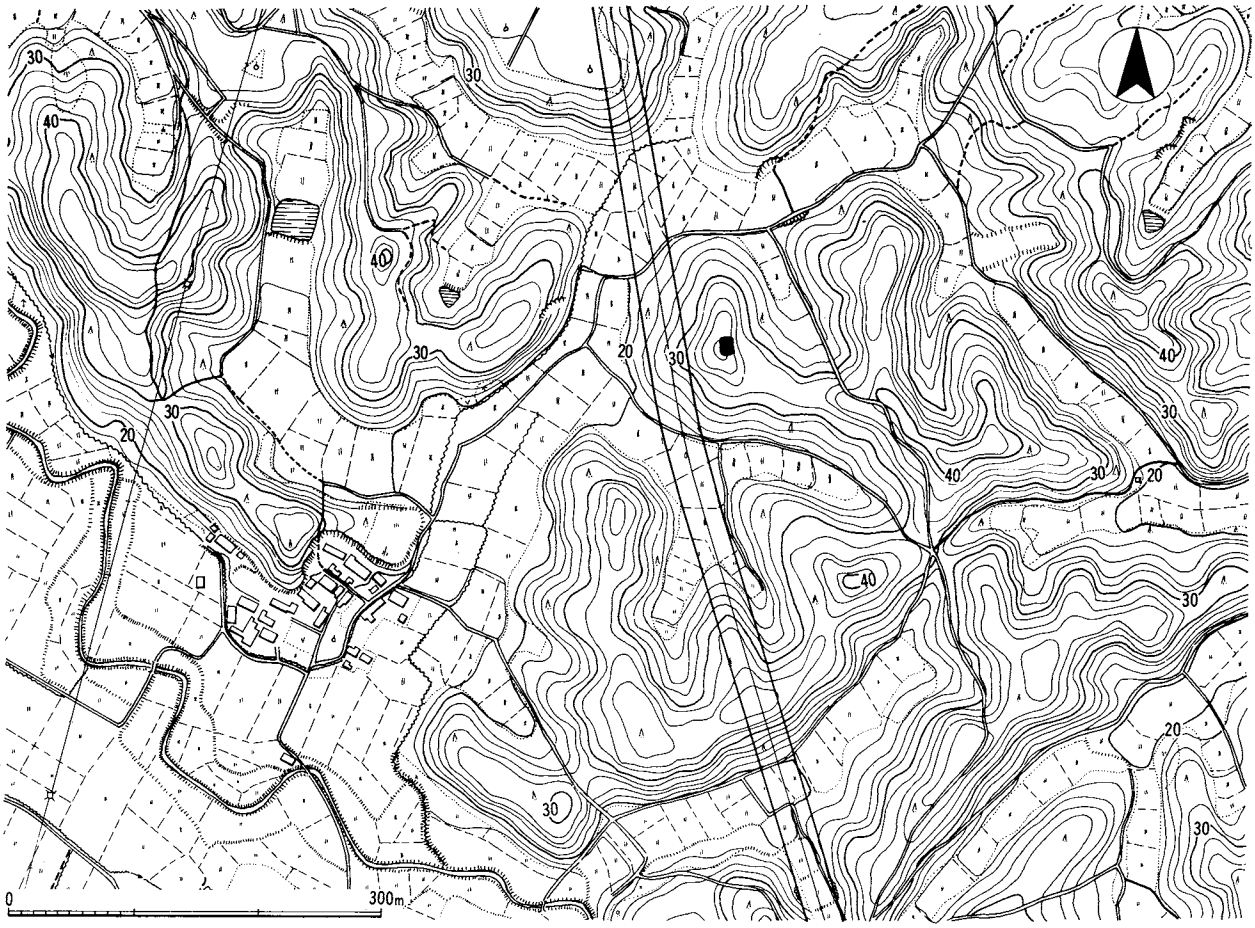
三重県教育委員会「中南勢開発地域遺跡地図」　昭和46年

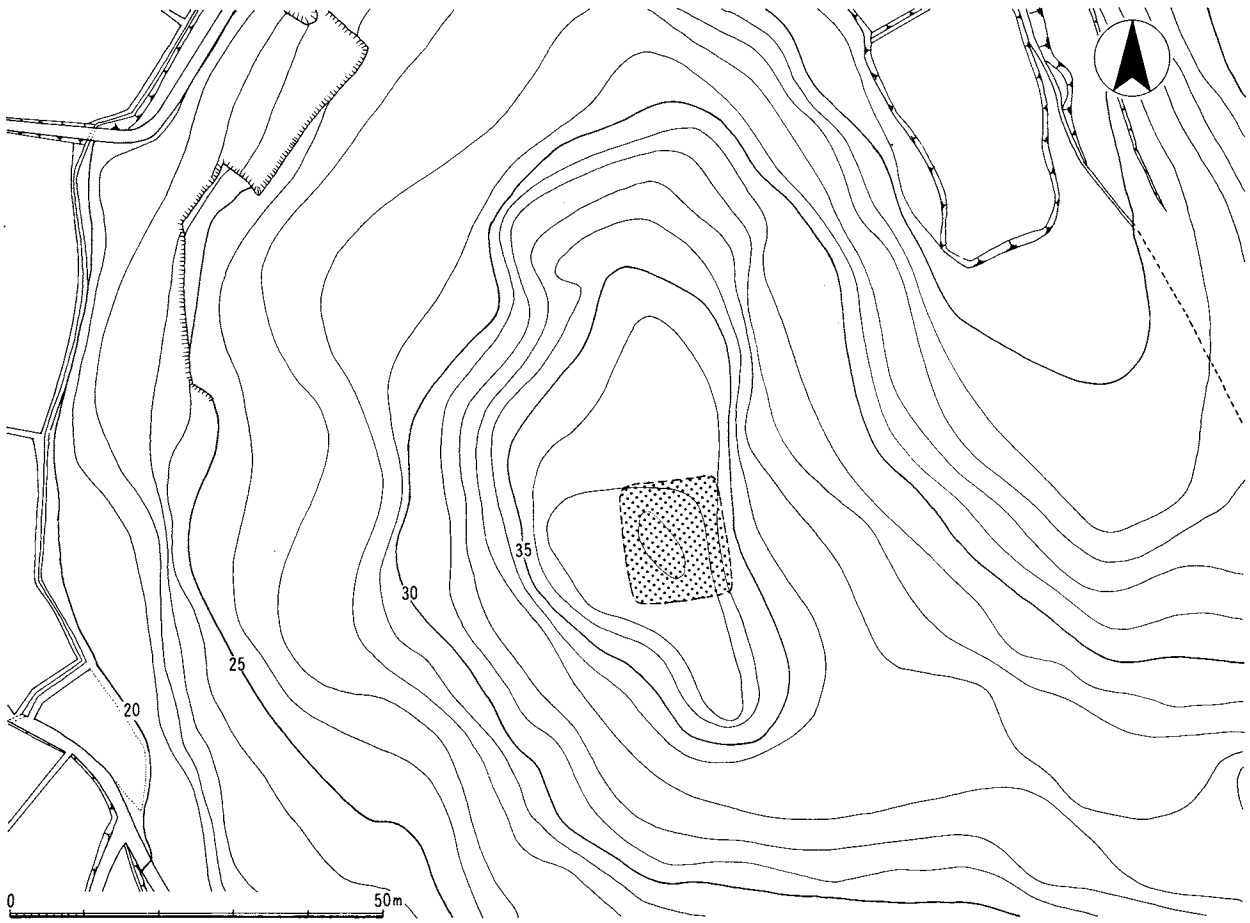
吉村利男「新畑遺跡発掘調査報告」　津市教育委員会　昭和48年



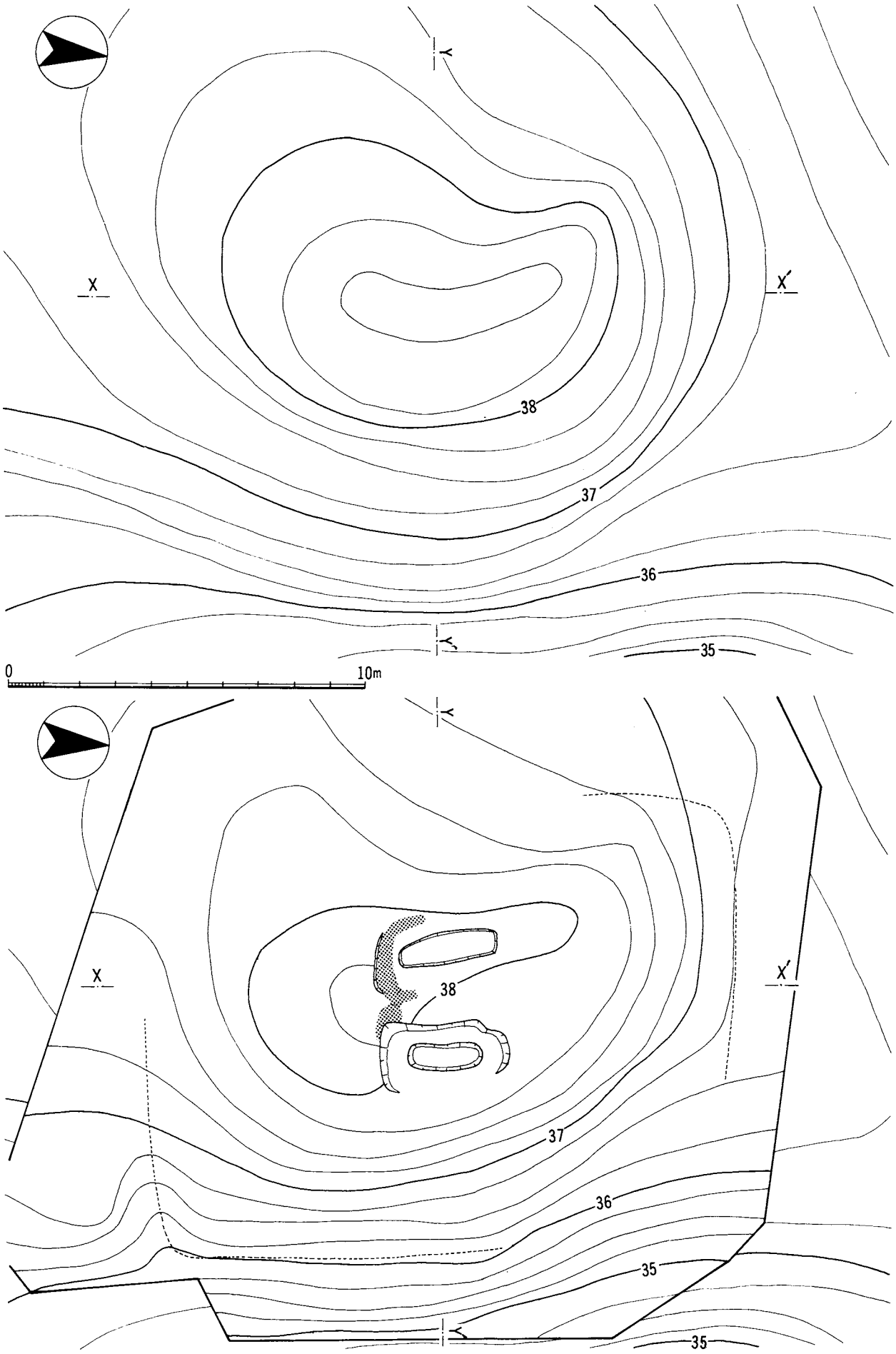
日余１号墳位置図（矢印日余１号墳）「津西部」１：50,000

1．明合古墳	9．高井古墳	17．おこし古墳	25．納所遺跡
2．大名塚古墳	10．新畑遺跡	18．鎌切１号墳	26．君ケ口古墳
3．岡南４号墳	11．平栄遺跡	19．神戸銅鐸出土地	27．森山遺跡
4．大山田古墳群	12．大ケ瀬弥生墳墓	20．上村遺跡	28．桐山遺跡
5．御屋敷13号墳	13．大ケ瀬遺跡	21．元井池古墳	29．亀井遺跡
6．メクサ４号墳	14．柳谷遺跡	22．高松弥生墳墓	30．堂山１号墳
7．殿村１号墳	15．野田５号墳	23．半田高松遺跡	31．清水西遺跡
8．坂本山古墳群	16．鎌切２号墳	24．養老遺跡	32．北端遺跡

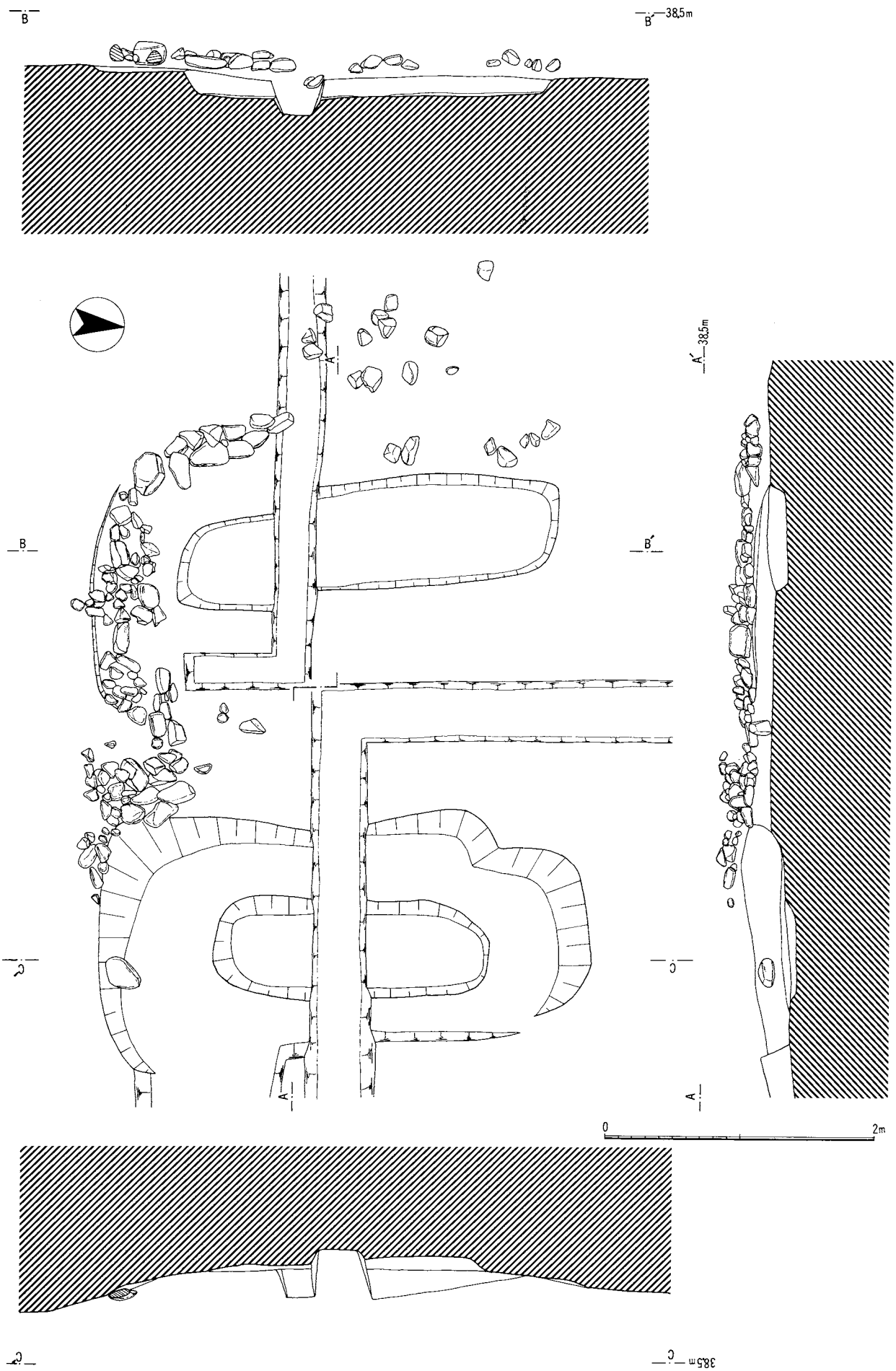




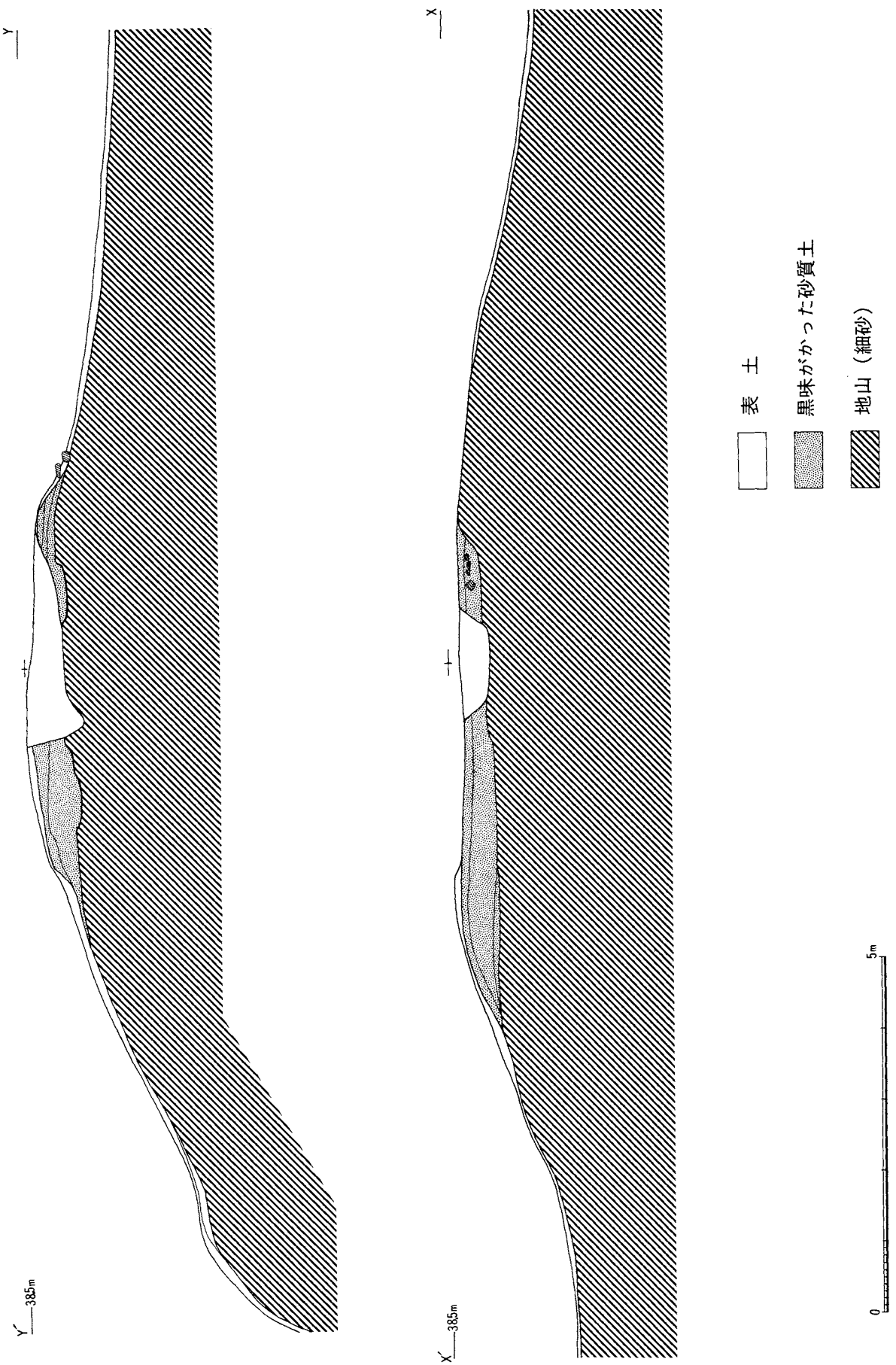
地形図（上1：5,000，下1：1,000）



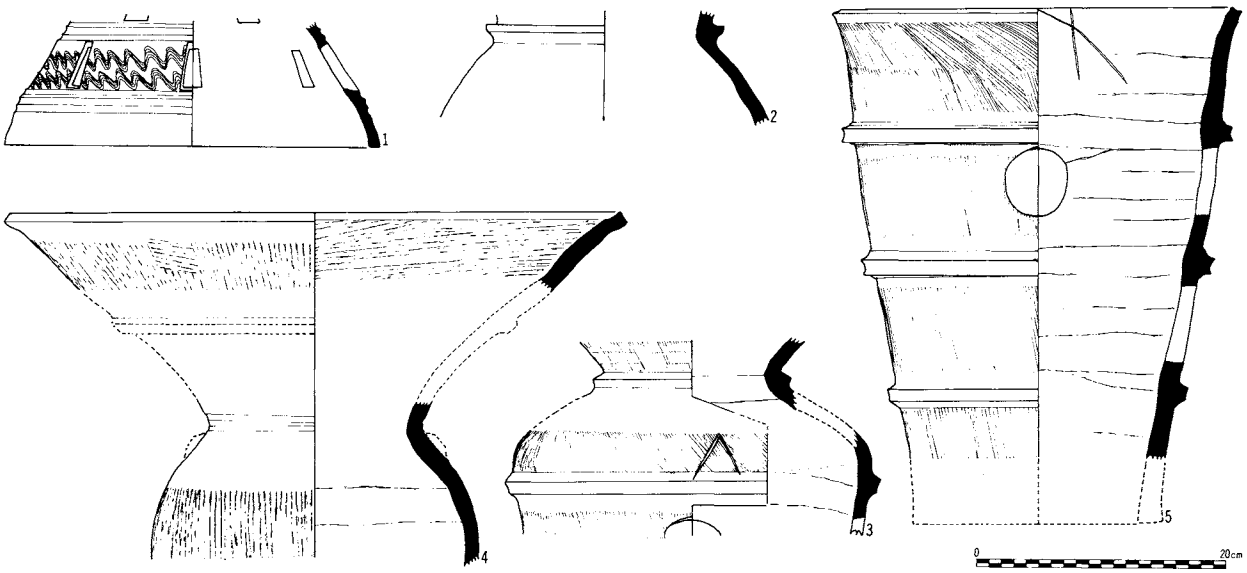
墳丘測量図（１：150）上発掘前、下発掘後、網目は配石

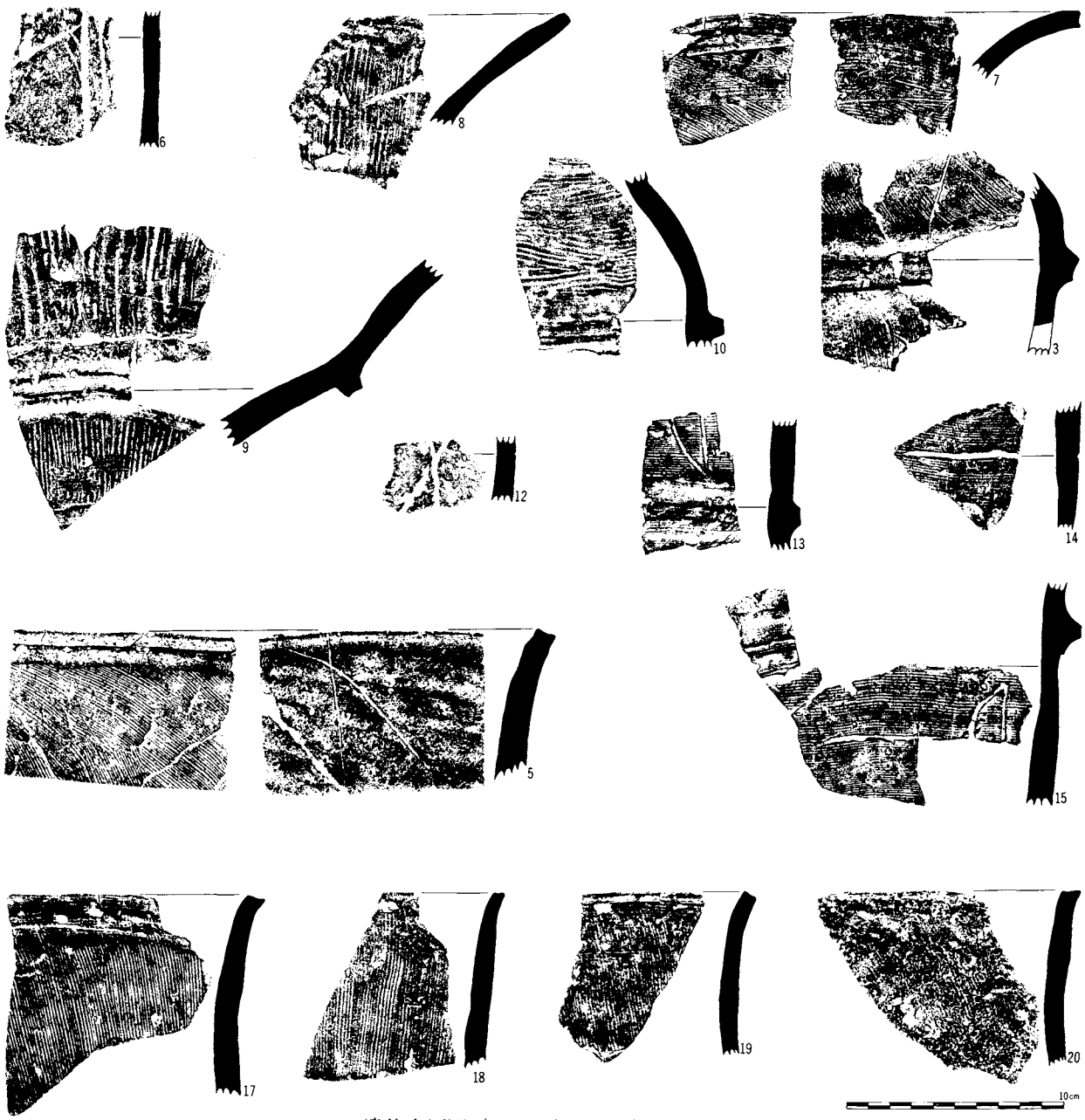


主体部実測図（１：40）

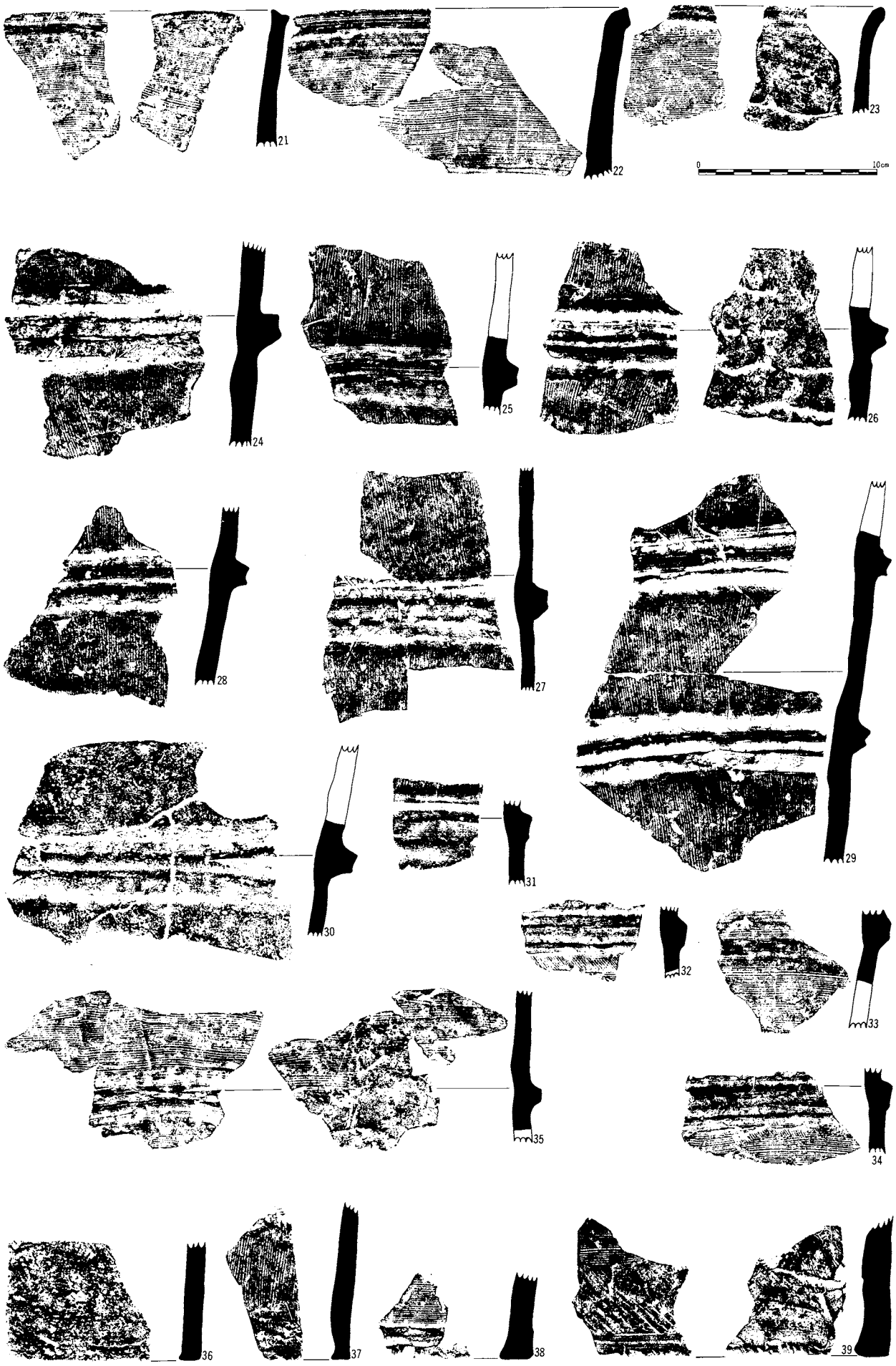


墳丘断面図（1：80）





遺物実測図（１：６）拓影（１：３）



遺物拓影（１：３）

遠　景（北から）

遠　景（東から）

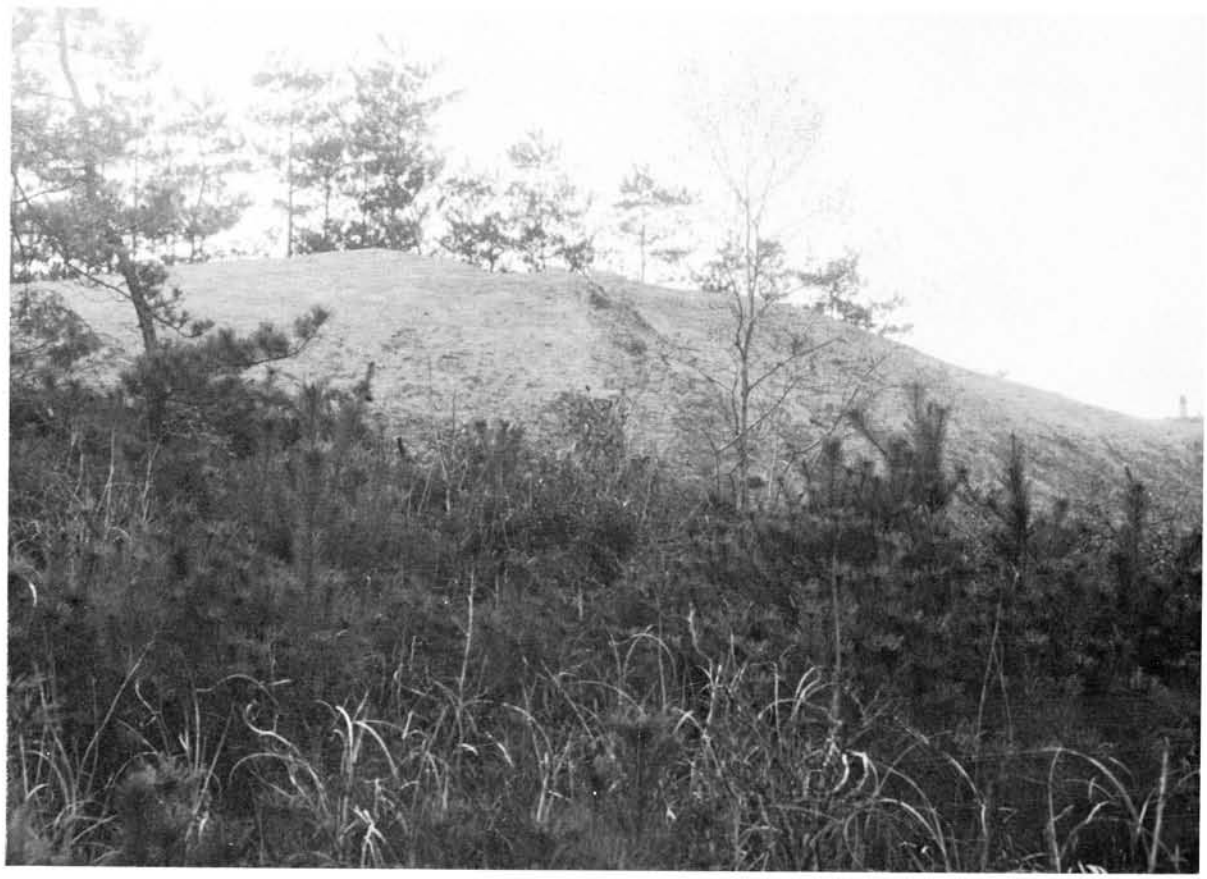
発掘前の墳丘（北から）

主体部全景（北から）

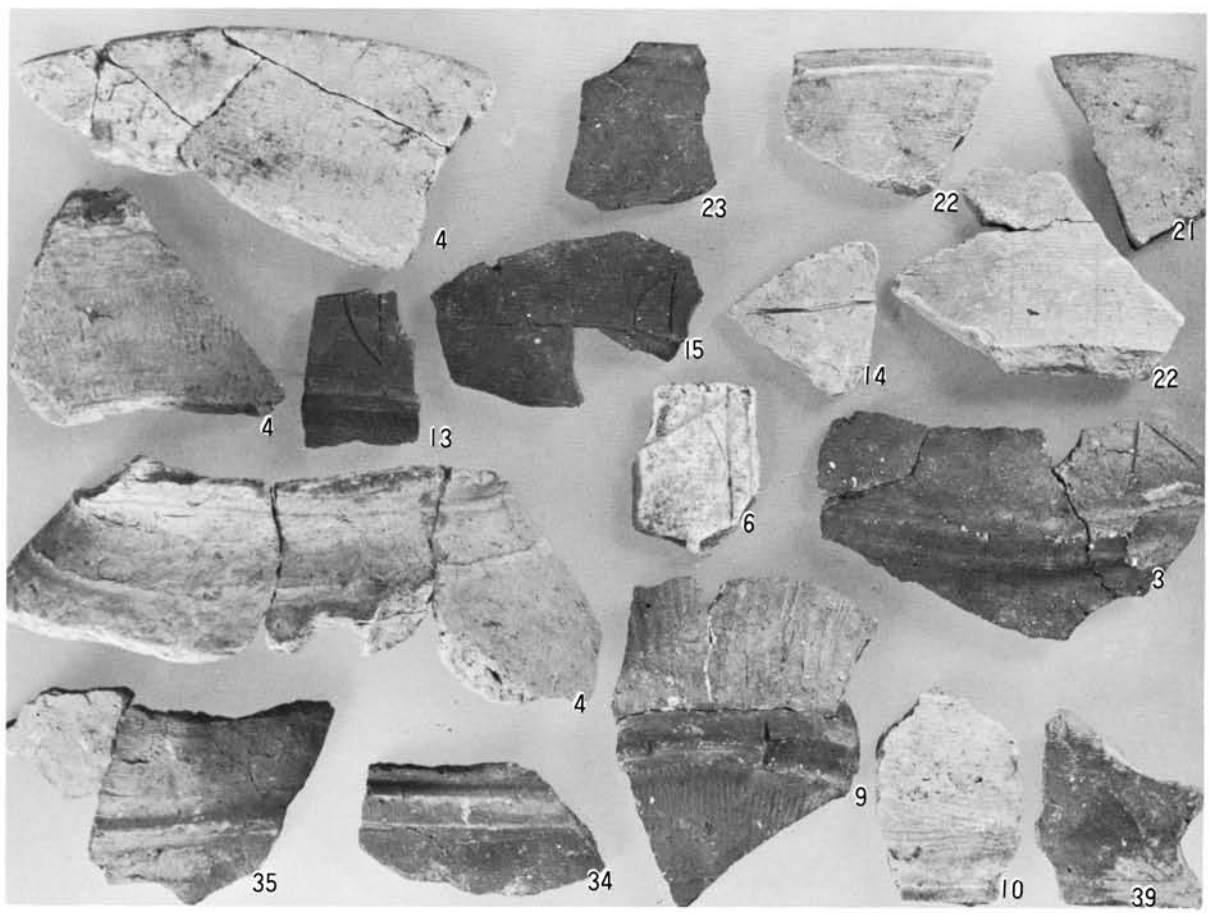
西側主体（北から）

東側主体（北から）

発掘後の墳丘（北から）



発掘後の墳丘（東から）



出土遺物（１：３）

昭和49（1974）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　20

近畿自動車道埋蔵文化財調査報告II

1974年3月29日

編集　三重県教育委員会
日本道路公団名古屋建設局

発行　三重県教育委員会

印刷　安芸郡河芸町上野2111
オリエンタル印刷株式会社